

昭和期の本店増築と本館改修

日本銀行文書局技師 中村茂樹

日本銀行本店の本館建物（以下、「本館」）は今までに三回の大改修が行われています。

最初の改修は前号で紹介した震災復旧です。後の二回は昭和期に行われた二度の本店増築計画に伴う大改修です。上の写真は昭和十三年（一九三八）、「本店」に隣接して増築された三号館の外観写真です。「本館」と同じ古典様式の三号館は、その真新しい外壁以外は見分けがつかないほど調和しています。今日では外壁の色も一体化して「本館」と同時代の建物に見えるほどです。

今回は昭和期に行われた二度の大増築とそれに伴う「本館」の改修をご紹介します。

一号館～三号館の増築

昭和の時代に入っても関東大震災の影響が続ききました。

大正十五年（一九二六）に「本館」の修復工事を完了したものの、それ以外の本店建物は損傷が大きく仮復旧が精いっぱいでした。

さらに震災後の度重なる民間金融機関での取り付け騒ぎと金融恐慌などで業務が急膨張したため、本店は著しく手狭となりました。

そのため「本館」に続く本店修復計画は大きく方向転換することとなり、昭和二年（一九二七）八月、井上総裁（注）は本店増築を決定しました。

そして、この増築設計は「本館」修復の長野宇平治に再び委ねられることになりました。日本銀行は行内に長野技師長以下総勢九〇名の技師・技手を擁する臨時建築部を組織しました。

臨時建築部の設立に当たり、長野は井上総裁から「今度は絶対に壊れない建物を造ること」を命じ

られました。

長野は師とする辰野金吾の「本館」の様に調和させることを自らの使命とし、外装の寸法、仕上げ材料などの細部にわたり「本館」の様式を完全に踏襲しました（写真）。

その一方、関東大震災の苦い経験に基づいて、増築建物の構造を鉄骨鉄筋コンクリート造りとし、明治時代と比べものにならない強固なものとなりました。

また、冷暖房、自家発電、エアシューターなど当時の最新式の

設備が完備されました。

工事は業務に支障を及ぼさぬように三期に分けて施工すること



写真1 完成時の1、2号館外観写真



写真2 ナウマン象の化石。骨、歯の化石26個、貝類化石24個が発掘された。
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

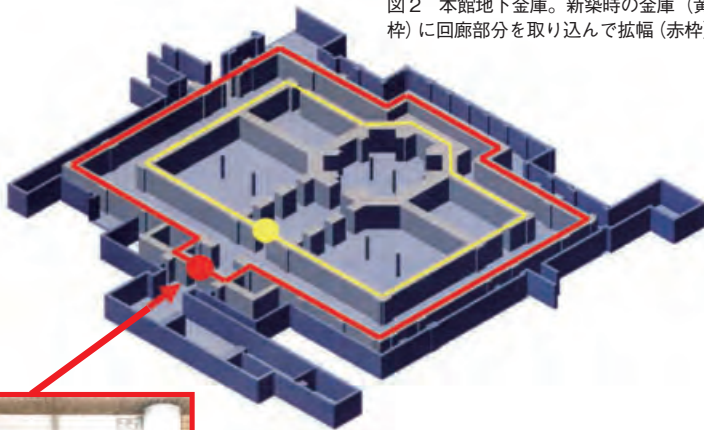


写真3 本館26号エレベーター。明治期の初代エレベーターの面影を残している。現在のエレベーターは昭和31年(1956)に更新したものの。

図1 昭和13年(1938)の本店(日本橋配置図)



図2 本館地下金庫。新築時の金庫(黄枠)に回廊部分を取り込んで拡幅(赤枠)



昭和7年(1932)の拡幅時に設置した金庫扉



写真4 1号館地下金庫前ホール。壁・天井/黄土色のテラコッタタイル貼り、床/黒・レンガ2色のゴムタイル貼り。本館地下金庫前に当時の面影が残る。

となり、昭和四年(一九二九)末から工事が始まり、第一期工事が昭和七年(一九三二)、第二期工事が昭和十年(一九三五)、第三期工事が昭和十三年(一九三八)に完成しました。この工期ごとのプロックを後に一号館、二号館、三号館と呼ぶようになりました(図1)。明治二十三年(二八九〇)に欧州の正統的な石造建築の姿を持つ「本館」が着工されて以来五〇年、設計は辰野金吾から長野宇平治に引き継がれ、地震、火災などの日本ならではの悪条件を克服して完成した増築棟は「本館」建設時に考えた理想の洋風建築を完成した姿としてとらえられます。見方によってはわが国の古典様式の一つの頂点と言えます。

なお、工事中に地下九メートルの所から約七〇万年前のナウマン象の化石が発掘されるという思わぬ副産物もありました(写真2)。

「本館」二度目の大改修

震災復旧から間もない昭和四年(一九二九)、「本館」は再び大改修を余儀なくされます。

「本館」北側に一号館を増築することに伴い、接続部のエレベーターと階段室を撤去し、西側中央部の旧西玄関の場所に同様のエレベーターと階段室を新たに設置しました(写真3)。

この接続部の改修により、一階では「本館」と一号館の営業場が一体化され、地下階では同接続部に旧金庫回廊を取り込む形で新たな金庫扉を設置して「本館」地下金庫の大幅な拡幅を行いました(図2)。

明治二十九年(二八九六)に造られた「本館」地下金庫は、一号館の地下大金庫(写真4)と共にその後長く本店金庫としての重要な役目を務めていきます。

また、「本館」東側に増築した三号館との間は連絡通路で接続され、「本館」の同接続部付近にエレベーターを増設しました。



写真5 北分館（2代目）
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

戦時下の北分館増築

既存の建物を取り壊しながらの増築工事には、業務に支障を来さないように仮施設の建築も必要となりました。

第二期工事に当たり同建設場所にあった仮使用中の北分館の代替として第三期工事の用地に仮設事務棟^{〔注2〕}が建てられました。

さらに第三期工事に当たり、同仮設事務棟の代替が必要となり、折からの事務量の増大に対応するための追加増築計画として北敷地に鉄筋コンクリート造り三階建ての北分館（二代目）の建設を予定していました。しかし時勢は急を告げ、この計画はいったん中止となります。

昭和十二年（一九三七）に日中戦争が始まったことによる業務の急増のため、北分館計画が再浮上し、木造二階建ての規模に縮小して、資材と労力の不足を克服しながら昭和十八年（一九四三）六月によりやく完成することができました。

木造の北分館は、戦後本店の新館増築工事のために壊されるま

で、二〇余年長く親しまれた建物でした（写真5）。

新北分館構想から新館増築へ

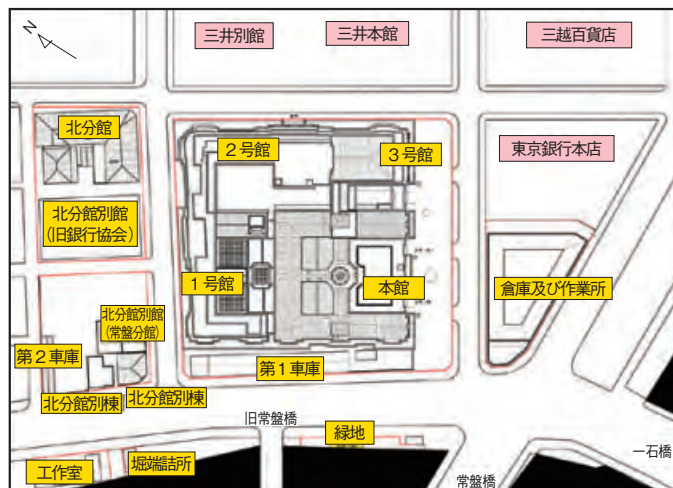
戦後の事務量の膨張に伴い、昭和二十五年（一九五〇）六月に管理部が設立され、本店の増改築問題を検討することになりました。

当初の構想は、木造の北分館を取り壊して、その跡地に鉄筋コンクリート造りの五階建てのビルを建てる案でした。しかし、朝鮮戦争特需の中、国の需要抑制策に合わせて増築計画自体が抑制され、北分館の建て替え構想は幻に終わりました。

その後事態が進展し、北分館に隣接する一体の土地（以下「北敷地」）を購入する方針が決定され、昭和三十四年（一九五九）から五年の歳月をかけ用地の買収が行われました（図3、写真6）。

この間、日本橋以外の敷地に第二営業拠点を設置する案も検討されましたが、最終的に昭和三十七年（一九六二）二月「現本館（本館）、一（一）三号館」および新北分館をもって一体的な本店

図3 昭和38年（1963）ごろの本店（日本橋配置図）



営業所を構成すること。新北分館の規模は可能な限り大きなものとする」として、用地買収で拡張した本店北敷地に新北分館を建築することが決定しました。

しかし、新北分館計画にはまだ解決するべき課題が残されていました。

北敷地に新北分館を建築することになったものの、公道を隔てた場所に切り離して建てることになり、現本館から離れていることによる機能上のマイナスは避け難いものでした。

公道をまたいで本館と新北分館

との連絡通路を設ける案も検討されたものの結局無理となり、公道を付け替えることにより分断された敷地を一敷地とする驚くほど創造的な案が生まれました（図4）。

付け替える道路は歴史的にも名高い道であり、江戸時代に將軍が江戸城から常盤橋（旧常盤橋）を出て日光へ参詣するときに通った御成道^{おなりみち}でした。この真つすぐな道をわざわざ曲げて付け替えるという至難の計画でした。

当然の事ながら同案の交渉は難航し二年以上を要しました。

昭和四十一年（一九六六）七月

写真6 昭和38年（1963）ごろの北敷地

図5 現在の本店（日本橋配置図）

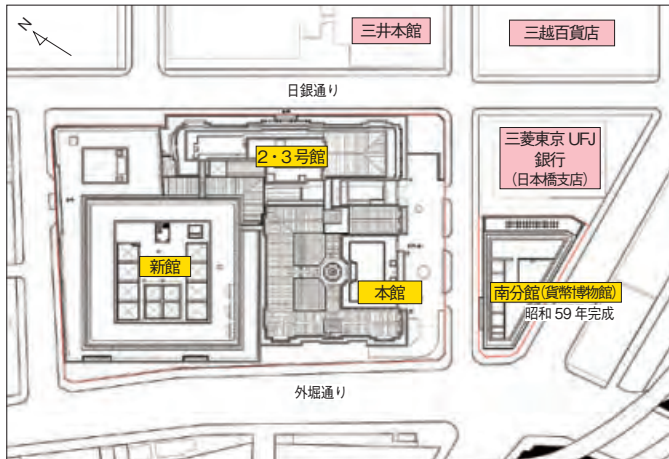


図4 新館着工前の道路付け替え



に懸案の道路付け替え工事が完了し、起案されてから実に一六年余りの歳月を要して、同年十月にようやく新館建築工事が着工しました。

当初の案は旧館（「本館」、一、二、三号館）の全部を残して残りの空地に柔構造による一七階建ての新館を隣接して建てるものでしたが、中央銀行として求めた堅牢



写真7 新館1期棟完成時



写真8 1号館解体。地上部分の解体はスチールボールによる大壁倒しが用いられた。（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

「絶対に壊れない建物」を使命とした一号館の解体工事は予想をはるかに超える難工事となり、要した期間は約一年、発破用（注4）の火薬は八トンを超えていました（写真8）。

「本館」の重要文化財指定

新館の第二期工事と並行して、旧館（「本館」および二、三号館）の改修工事が行われました。

性と当時幕開け直後の超高層ビル建築（注3）は相いれず、結果的には一号館を取り壊し、その跡地も利用して一〇階建てとすることになりました。

本店業務に支障を来さないように、新館増築の工期は二期に分けて行われました。昭和四十四年（一九六九）の第一期完成時の写真を見ますと、一号館はそのまま残した上で、その向こう側に新館の半分が建てられています（写真7）。

その後、第二期工事として、一号館を解体し、その跡地に新館の残り半分を建設し、昭和四十八年（一九七三）に新館は完成しました（図5）。

特に、「本館」は改修工事の前から国の重要文化財候補とされていたため、文化庁と事前に改修内容を確認しながら工事を行いました。

「本館」の歴史保存と業務対応の両立を図りながら、震災復旧以来となる老朽化した屋根の全面改修を始め、窓シャッター、空調設備、電気設備などの更新が行われました。

改修工事を終えた翌年の昭和四十九年（一九七四）、明治洋風建築の貴重な遺構として、「本館」は国の重要文化財に指定されました。

今回は、日本銀行の支店建物について明治大正期を中心に紹介します。

（注1）第九、第一二代日本銀行総裁井上準之助、大正十二年（一九二三）九月の関東大震災時も総裁として陣頭指揮を執った。

（注2）この建物は南分館と呼ばれ、明治三十二年（一八九九）築の初代南分館、昭和十六年（一九四一）築の南分館（倉庫）を含めると、貨幣博物館のある現在の南分館は四代目のものとなります。

（注3）日本では一〇メートル以上の高さのビルを呼ぶ。昭和三十八年（一九六三）の法改正により従前の三メートル規制が緩和され、昭和四十三年（一九六八）日本初の超高層ビル霞が関ビル（三六階、一五六メートル）が完成。

（注4）爆薬を使って古い構造物を破壊すること。地下部分の解体で使用され、発破回数は延べ九〇〇回に及んだ。